

ドイツ語文化圏におけるチェコ文学の受容について

大河内 朋子

スラブ語文化圏の西端に位置するチェコは、東側の同じスラブ語族の文化ではなく、西側のドイツ語文化から強い影響を受けてきた。文学に関して言えば、プレミシュル王朝がドイツの吟遊詩人たちを手厚くもてなした13世紀に始まり、19世紀末に至るまで、ドイツの文学が他の文学を圧して繰り返し翻訳・紹介され、時にはチェコ文学の中に同じ素材のあるいは同じ様式の作品を生み出してきた。ドイツの文学が継続的にかつ他の文学に増して受容された理由は、ドイツに隣接しているというチェコの地理的な位置に加えて、強制されたものであるとも言えチェコの知識人がドイツ語を理解しえたことにもあるだろう。19世紀後半に言語が非常に激しい民族対立を引き起こし政治問題化するまで、ドイツ語は宮廷と官庁の言葉として通用していたし、学校教育の場で教えられてきたからである。

他方、チェコの文学はドイツ語文化圏内でどう受容されただろうか。結論を言えば、チェコスロバキア共和国が成立するまで、つまりボヘミアとモラビアにドイツ人の王が君臨していた時期において、初めは断続的に、1880年頃以降は政治的な思惑も込めて熱心に、チェコ文学はドイツ語文化圏に伝達されたけれども、チェコ文学の価値を承認させるには至らなかった。受容を阻んだ最大の要因は、ボヘミアに居住していた多数のドイツ人にある。主としてドイツとの国境地帯と首都プラハに住み、経済力もあった彼らは、そのうち極めて少数のものだけがチェコ文学の紹介と翻訳に努めたに過ぎず、大多数のものは文化的な優越感からチェコ文学に関心を示さず、逆にボヘミアとモラビア以外に住むドイツ人に向かってチェコ文化についての誤ったイメージを伝えていた。反宗教改革以後の200年間チェコの文学が深い停滞期に陥り、18世紀末に Herder がチェコの民謡に注目して以降ようやく「再生期」を迎え、19世紀末のチェコ・モデルネ宣言が西欧の文学に追いつくための転機を成したというチェコ文学の歴史を認めるとしても、ドイツ語圏におけるチェコ文学受容の遅滞は、チェコ文学の「後進性」にではなく、まずもってドイツ人の文化的優越感にその原因を求めるべきであろう。

以下において、旧東独のボヘミストである Manfred Jähnichen が1972年に公刊した大著 *Der Weg zur Anerkennung. Tschechische Literatur im deutschen Sprachgebiet 1861-1918* (Berlin, Akademie-Verlag) に依りながら、チェコ文学の受容を阻んだ幾つかの要因について考えてみたい。

1

まず19世紀後半から第1次大戦までの時期におけるチェコ文学の翻訳状況を素描しておきたい。

19世紀初頭からチェコ人の間で民謡と昔話の収集やその研究が盛んになったことを受けて、チェコ文学のドイツ語への翻訳も民謡と昔話から始まった。19世紀中葉のその代表的な

翻訳者は、プラハに住むドイツ系の Wenzig とチェコ系の Jarosch であるが、彼らは同時に近代チェコ文学の精力的な紹介者でもあった。Wenzig が Kollár や Čelakovský, Jablonský など三月前期の詩人たちを取り上げて、チェコ民族の宗教的な敬虔さを伝えたのに対し、Jarosch の方は社会問題に関心を持つ Mácha などの作品を翻訳した。

Wenzig と 特に Jarosch の活動はごく短期で終わり、1860年の半ば以降 1880 年までチェコ文学の翻訳はほぼ中断すると言ってよい。1879年に成立した Taaffe 内閣の民族融和政策が、却ってボヘミアのドイツ人とチェコ人の双方に民族主義を根づかせ、両民族を反目させ始めると、それに抗議するかのように文学の交流が再び活性化してくる。1880年代から1890年の中頃にかけて最もよく紹介・翻訳されたチェコの詩人は Čech と Vrchlický である。Čech は 1880年代におけるチェコの民族感情を代弁していると言われる詩人であり、民族の過去を称えスラブの同胞を賛美する彼の作品は、チェコ人の間で大きな反響を呼び、チェコ人批評家からも最高の賛辞を受けていた。愛国的な素材とテーマのせいで、Čech の翻訳者は、初期の Müller のような例外はあっても、Rehák や Fux-Jelenský, Koutek のように大抵チェコ人であったが、しかし同じ理由で、加えて翻訳がプラハのチェコ系地方誌に発表されることの多かったため、Čech の詩はドイツ人に受け入れられ難かった。他方 Čech より少し遅れて始まった Vrchlický の翻訳は、1880年代の Müller, Grün, 1890年代の Adler, Albert, Boos-Waldeck, Kwaysser, 20世紀に入って Fürth, Eisner など、次々と現われる新しい翻訳者によって維持され、その翻訳点数もかなりの数に上っている。チェコの詩人の例に漏れず、Vrchlický もチェコ文壇での地位を安定させるためにウイーンやドイツ国内で得る名声を重要視していたし、後年若いモデルネの世代から攻撃されたために、一層翻訳の数を増やす必要に迫られていた。Vrchlický の翻訳者は、大抵ボヘミアに住むドイツ人ないしドイツ系ユダヤ人であるが、それは Vrchlický の作品が、Čech とは違って民族の特殊性に関わるものではなく、芸術や生といった普遍的なテーマを持ち、チェコの緊迫した政治状況の中では、「闘いのざわめく轟音の中に響く平和の静かな和音」⁽¹⁾のように、現実を忘れさせる役割を果たしたからであろう。翻訳点数の多さに加えて、ライプチヒやミュンヘン、ウイーンなどでの出版に成功したこともあって、Vrchlický の名は90年代末頃のドイツ語文化圏において、チェコ文学の代名詞になっていたらしい。

ところでチェコ文学において、韻文は散文よりも高級な文体、必要ならば散文作品によって補なわれるべき、主たるジャンルとみなされていた。従ってチェコの詩人たちはまず韻文詩を書いたし、チェコ文学の紹介者や翻訳者もまず韻文詩を取り上げた。しかしドイツにおいては、ロシアのリアリズム文学の受容が示しているように、小説や物語といった散文の方により多くの読者が流れ、出版社にとってもより歓迎すべきジャンルになっていた。既に Dostoevskij や Gogol, Turgenjev などの小説を出版していたライプチヒの Reclam 文庫も、スラブ部門を更に充実させる目的で1880年代初めからの約10年間に8冊のチェコ文学を出版した時、同じ理由から韻文詩を1冊も取り上げず、全てを散文作品とした。当時のチェコ文学の状況を反映して、それらの散文作品に長編小説は少なく、その殆どは人生の一断面を描写している短い物語であった。もちろん Reclam 文庫という有力なシリーズに入ったことが、直ちにドイツにおけるチェコ文学の受容を約束するわけではなかったが、ロシアやポーランドなど既に認知されている他のスラブ語文学と同列に置かれたことや、いくつかの散文作品の優れた翻訳によって、チェコの散文に対して行なわれてきた中傷の効力を多少とも弱める

結果になった。1900年代に入ると、プラハのチェコ系出版社が、19世紀後半の主としてチェコの長編小説を『スラブ小説叢書』という形で紹介し始めた。ゲルマンやギリシャの神話をモチーフにした Zeyer の騎士物語に始まり、同じ Zeyer のロマン派風恋愛小説で終わるこのシリーズは、それ以外にチェコ民族の文化史的な細密描写を得意にする Jirásek の歴史小説、チェコ現代社会の一面を切り取って見せる Šlejhar の物語集などを含み、素材とテーマにおけるチェコ散文の多様性を示しているのだが、プラハという出版地のために、ボヘミアの域外では殆ど知られることなく終わった。チェコの散文がより広範な読者を獲得するのは、第1次大戦後プラハ出身の Pick がベルリンでチェコの散文作品集を発表した時である。

19世紀後半におけるチェコ文学の翻訳・評論活動は、ボヘミアの首都プラハを中心に行なわれていた。しかし1890年代の半ば以降、もう一つの中心地として帝都ウィーンが浮上してくる。ウィーン在住のチェコ人たちの中から、Čech の優れた翻訳者であった Fux-Jelenský や、19世紀の韻文作品を集大成した Albert などが出て、既に知られていた音楽や美術と並んで、チェコの文学にもウィーン人の眼を向けさせようと努めた。今世紀の初めにはウィーン在住の Saudek が、やはり長年ウィーンに住む Machar のカトリック教権主義批判の書と、モラビアに住むデカダンスの詩人 Březina を翻訳したが、その作品選択がウィーンの文学的・社会的状況にふさわしかったために高い評価を受け、この2作によって遅ればせながらウィーンでのチェコ文学の地歩は固まったかに見えた。特に後者の成功はプラハの文学界に波及し、Březina に対するチェコ人批評家の見方を変えただけでなく、チェコ文学の受容過程にとって極めて重要になるドイツ系ユダヤ人作家たちの活動を引き起こす引き金にもなった。ところでウィーンでは、翻訳と並んで雑誌上での評論活動が文化の交流において大きな役割を果たしていた。ボヘミアのチェコ人とドイツ人の対立が民族憎悪の様相を見せるに伴って、一部のウィーン人の間で理性的な相互理解を目指す政治姿勢が強まったが、その政治傾向に合わせて幾つかの雑誌が新しく創刊され、民族交流のためのフォーラムが提供されていたからである。そうした雑誌の先鞭をつけかつ最も衆目を集めたのが、1894年創刊の週刊紙 Die Zeit である。文化面を担当した Bahr は、帝国内諸民族の「精神的な結合、できれば結婚」を「オーストリアに住むドイツ人の使命」と考えて、進んで非ドイツ語系民族に発言の機会を提供した。チェコ文学については、プラハ在住の批評家 Krejci に体系的な紹介をするという課題が委ねられた。Krejci は19世紀後半以降のチェコ文学を社会参加型の文学と逃避型の文学に分けて、その二極性を示し、併せて文学様式の展開における他のヨーロッパ文学との同時代性を指摘することにより、ドイツ人民族主義者によって喧伝されていたチェコ文学の後進性という偏見を是正しようと努めた。

1910年頃までのウィーンあるいはプラハでの翻訳・評論活動は、チェコ人ないし一部ドイツ人の努力にも拘わらず、残念ながら少数の例外を除けば、ドイツ国内はもとより、オーストリアのドイツ人社会にも充分には伝わっていない。第1次大戦以降の Brod を中心としたプラハ・ドイツ系ユダヤ人作家たちの活動と比較する時、1910年頃までの活動は、ドイツ語圏におけるチェコ文学受容の前史という印象を免れがたい。Březina などを翻訳した Pick と Eisner と Werfel、そこに Brod や Fuchs も加えて、彼らユダヤ人作家たちがドイツ語文化圏の壁を突破した時、チェコ文学はようやく伝達される時代を了え、受容される段階に入ったと言えるだろう。

2

長年に亘ってチェコ文学の受容を阻んできた最大の障害は、ボヘミアとモラヴィアに住むドイツ人たちのチェコ人に対する文化的な優越感情であった。彼らはほぼ1000年の間、商人や官吏、農民、工場主などとして定住し、バイエルンやザクセンとの国境地帯ではチェコ人を上回る人口を擁していた。経済的に富める者や政治的な権力を持つ者の割合がチェコ人に比べて高く、こうした社会の上層部に位置するという優越感から、ドイツ人こそがボヘミアの文化の担い手であるという意識が芽生えたろうことは、容易に想像できる。文化の支え手や伝え手としてのドイツ人が考えられる時、陰に陽にその対極には文化的な貢献を成しえないチェコ人が想定されてきた。19世紀後半に民族対立が激化するに従って、ボヘミア・ドイツ人の意識の中で両民族の文化的な落差はますます広がり、チェコ人は「半野蛮人」と言われるところまで転落している。

ボヘミア・ドイツ人の多くが信じるチェコ民族の非文化性は、チェコ人の文学と言語の「未熟さ」によって立証されると考えられてきた。ボヘミアの国境を越えたドイツでも、チェコ人の文学がドイツ文学の模倣に過ぎず、独自性を欠いていることや、その原因が無骨なチェコ語にあることが繰り返し宣伝されている。例えばチュービンゲンの Cotta 社が発行していた朝刊紙は1863年に次のような記事を載せている。

「チェコ人が立派な民族文学を創造するのを、誰が妨げたらうか（略）チェコ人はこの点でまことドイツ人によって妨げられたのではなく、彼らの言いまわし（Idiom）の発達不能性によって妨げられたのだ。と言うのも、それはスラブ語族のまさに卓越しているとは言えない一員に過ぎないのだから。」⁽²⁾

既に Čelakovský や Machá, Kollár, Němcová などを輩出していた近代チェコ文学について、おそらく殆ど情報を持っていなかったであろうとは言え、Goethe と Schiller の出版で名を成した Cotta 社がこのように書くということは、チェコ文学の後進性とチェコ語の粗雑さに対する偏見がドイツ国内に深く根付いていたことを証明しているように思う。Cotta 社の記事はこれに続けて、民族主義的な優越感を露にしながら、チェコ文化の源としてのドイツ文化について書き記している。

「誰がチェコ人にドイツの教養を受け取り、ドイツの文化とドイツの言葉を身に付けるよう強いたらうか。ドイツ人ではなく、チェコ人自身の必要性がそうさせたのだ（略）およそ文化が現われている所ではどこでも、我々がチェコの住民の中へ浸透していくのを目のあたりにする文化は、ドイツの文化である。」⁽³⁾

こうした記事はドイツ系の新聞に幾らでも見つけることができるだろう。ドイツ民族が文化の伝道者としてボヘミアの森の彼方へ西ヨーロッパの教養を伝え、その結果東方のスラブ民族は徐々に文明に対する嫌悪感を取り除き、自ら文化を創造する力はまだ育まれていないとしても、西欧の文明を少なくとも受容することができるようになったという見方は、1880年頃までのチェコ民族像の基調を成していると思われる。

19世紀末が近づくにつれて、チェコ人に対する文化的な優越感は、スラブ民族全体に対する人種差別的な嫌悪感にとって代わられる。チェコ人を初めとするスラブ民族は単に劣っているだけでなく、「文明化を重荷になる鎖であるかのように引き千切る」⁽⁴⁾ 奴隷のような民族であるといった中傷が、雑誌に掲載されるようになった。半世紀後のユダヤ民族に対してと同じく当時はチェコ民族に対して、ドイツ人デマゴグたちは、伝統あるゲルマン的文明

の不倶戴天の敵であるとか、スラブ族のアジア的粗野さと雌雄を決する時であるとか、チェコ人の指導者にはせいぜいが腐敗したドイツの血しか流れていないといった中傷をなし、それが少なからぬドイツ人に受け入れられた。かつて喧伝された文化的な後進性という誹謗は、更に虚偽の度合いを強めて、チェコ人から人間的な理性や文化的な創造力を奪い取るに至っている。1893年にウィーンで発行された極右の機関誌は、チェコ人を労役に服する従順な家畜に見立てて、次のように侮蔑している。

「チェコ人、それはヨーロッパの中国人である。彼らは労働と勤勉の驚くべき能力に満ちている。彼らは並ぶものなき忍耐と根気強さを、ほぼ驃馬以上と言ってよいほどに持ち、あらゆる困難に打ち勝つ熱心さのとしえの勝利を祝福する。しかしそれと並んで彼らは、あらゆる創造的才能の欠如、創造的才能の、混じり気のないタブラ・ラサが生じるほどに完全無欠な欠如をも現わしている。」⁽⁵⁾

こうしたデマがドイツ人の間で支持されている時期に、チェコ人の文学を伝えようと試みても、その企ては忽ち破産せざるをえない。1906年にプラハで創刊された文学雑誌『チェコ・レビュー』の「敗北宣言」は、その間の事情を良く伝えている。同誌はチェコ人側からドイツ人に向けてチェコ文学の情報を発信するために創刊されたのだが、「隣人の言葉と精神生活に親しみたいという気持ちやその能力を極めてわずかしか持っていない」⁽⁶⁾ドイツ人に敢えて近づこうという当初の意気込みにも拘わらず、早くも3年目には月刊から季刊へ格下げされ、5年目には廃刊に追い込まれている。⁽⁷⁾同誌の最終号は驚きとも嘆きとも見える口調で次のように記している。

「我々は称えられることを望まなかったし、多くの読者を得ることさえ望まなかった。しかしその分一層熱心に読んでももらいたいと願っていた。我々になされたような体系的なボイコットに遭うなどはありませんことだと思っていた。」⁽⁸⁾

ところでこの『チェコ・レビュー』誌もそうなのだが、チェコ側からチェコ文学の翻訳や紹介が企てられる時、それはチェコ文学に対する誤った見方を是正したいという純粋に文学的な動機からなされるのではなく、チェコ文学の価値を認めさせることを通して、チェコ人を劣等民族とする偏見を取り除き、政治上の効果も得たいという思惑に多かれ少なかれ基づいている。ほんの一例だが、1907年の Jakubec のドイツ語によるチェコ文学史⁽⁹⁾が、チェコ文学の独自性と西欧文学との同時代性を繰り返し指摘しているのも、ドイツ人デマゴグが文学の遅滞を引き合いに出して、チェコ民族の劣等性や後進性を喧伝するやり方を牽制しているように思える。ただこの点では文学より音楽の方がはるかに効果的であった。1892年にウィーンで Smetana のオペラ『売られた花嫁』が上演された時、あるウィーンの一般紙は、こうした素晴らしいオペラを持っているチェコ文化についてそれまで何も知らなかったことに驚きを隠していない。それはチェコ人の「優等性」に対する驚きでもあり、一時的にもせよドイツ人デマゴグの論調を鈍らせる効果があった。チェコ人の論壇内でも文学的な「事件」はたやすく政治に巻き込まれている。例えば1817年と1818年に Hanka が相次いで古チェコ語詩の手稿を「発見」したが、1880年頃まで続くその真贋論争が純粋に学問的であったとは言いがたい。贋作説を取る論者は民族の裏切り者の名で呼ばれたし、また Palacký が Hanka 擁護の書をチェコ語ではなくドイツ語で著わしたことなどを見れば、それがチェコ文学史に拘わる文学論争だったというよりは、文化的な民族としての矜持を賭けた政治論争だったことが良くわかる。⁽¹⁰⁾

チェコ人が民族のprestigeを高める目的でチェコ文学を翻訳し紹介するのは、愛国的な感情の現われであるとしても、ドイツ人が同じ文学的行為をすれば、それはチェコ民族に対する政治的な利敵行為と受け取られて、ドイツ民族主義者から非難された。「社会生活の全てに政治が混じっている」⁽¹¹⁾時代にあつては、どんなに注意深く文学を政治から切り離そうと試みても、あらゆる文学的企図は民族対立の文脈の中で解釈されてしまう。今世紀初頭のプラハ・ドイツ系ユダヤ人たちは、ドイツ語文化圏にチェコ文化の「幸福な上昇」⁽¹²⁾を知らせたいという純粋に文学的な動機からチェコ文学の翻訳を志したのだが、それはチェコ民族に対するアンガージュマンとしか解釈されなかった。Vrchlický を翻訳したウイーンの貴族 Boos-Waldeck も、Vrchlický に対する素朴な感激から精力的な翻訳者になったのだが、民族主義者によって、ドイツ民族のために戦った荣誉ある一門の祖先を裏切る行為だと痛罵された。もちろんチェコ文学の翻訳だけが、政治の影に覆われていたわけではない。Rilke や Brod のように自作にチェコ人を登場させることも、「スラブ人に秋波を送らないこと」⁽¹³⁾という鉄則に反していると見なされた。こうした状況の中でチェコ人の文学を翻訳することは、勇氣とともに孤立に耐える力をも要求している。Vrchlický の優れた翻訳者だった Adler が、チェコ・モデルネの詩人たちの間で自分の翻訳が評価されなかったのを知った時に語った次の言葉は、ドイツ人翻訳者の心情をよく表わしていると思う。

「民族的同胞の先入見を克服しなければならなかったドイツ人として、チェコ側で私の状況を理解してくれて、それにふさわしく暖かく受け入れてもらえたならば、私はなぐさめられたことでしょう。」⁽¹⁴⁾

文学の交流に関しては出版社の果たす役割も大きい。ところが民族対立が社会のあらゆる分野を覆っている時期に、ドイツ語圏内でチェコ文学のための出版社を見つけることは、はなはだ困難であった。例えば1880年代の初め頃のオーストリア帝国内には、非常に短命なものを含めても、チェコ文学を掲載できる雑誌はほんの数冊しかなく、ドイツ国内では Sacher-Masoch がライプチヒで編集していた雑誌くらいであった。その当時 Vrchlický を翻訳し、十数年間中断していたチェコ文学の紹介を再開したドイツ人ジャーナリスト Müller は、こうした新聞に加えて、自分で編集するボヘミアの地方紙にも翻訳を発表したのだが、これだけでは彼の仕事はボヘミアのドイツ人読者層にも届かなかった。Müller は数多くの本の出版計画も立てていたが、2冊しか実現せず、しかもその内の1冊はボヘミアの地方都市というドイツ語文化の周縁部でしか出版できていない。

出版社や掲載誌の見つけにくさは、ドイツ系とチェコ系を問わず、チェコ文学の全ての翻訳者が経験したことであるかもしれない。そしてドイツ人読者の獲得しやすさを考えるならば、ボヘミアではなくウイーンにある出版社の方が、ウイーンよりもドイツ国内にある出版社の方が有利であるのは言うまでもない。Müller以前の代表的な翻訳者である Wenzig と Jarosch に例を取れば、1870年代のドイツ系文学史や事典に、1850年代の Wenzig によるチェコ文学史や彼の翻訳に基づく記述はあっても、1860年前後の Jarosch の仕事が全く知られていなかったのは、ボヘミア・ドイツ人の Wenzig がハレやライプチヒでも出版社を見つけることができたのに対し、⁽¹⁵⁾チェコ人の Jarosch がプラハでしか出版できなかったことによるだろう。プラハの批評家 Hoffmann の言に従えば、半世紀後の1907年になっても事情は変わらなかったようである。

「征服軍がプラハから派兵される限り、およそいかなる成功の見込みもなかった。オースト

リアのドイツ系出版社さえ、彼らの本がライプチヒやベルリン、イエナで出たものよりもわずかしこ購入されないことに不満を言っている。チェコ系の出版社に対する偏見は決定的にはるかに大きい。不如意な除け者状態を打ち破るために、チェコ人はまずドイツ系の出版社を得なければならないだろう。」⁽¹⁶⁾

もちろんドイツ国内で出版されたことが、多数のドイツ人読者の獲得を常に保証しているわけではない。例えば Reclam 文庫に入ったすべての翻訳作品が成功したわけではなく、Adler による Vrchlický の優れた翻訳のように、出版地以外の要素が働いてチェコ文学の受容を妨げることは、ごく普通の文化現象として理解できる。

なおチェコの演劇をドイツ語圏の劇場で客演することや、ましてドイツ系の劇場が自らのレパトリーとして上演することは、翻訳の出版よりはるかに困難であったことを付け加えておきたい。

3

極めて不利な社会的条件のもとで、チェコ文学の情報はドイツ語文化圏に向けて発信されたのだが、そうした文学外にある社会的な枠組み以外に、文学内にある認識のずれも幾つか重なって、チェコ文学の受容は一層進みにくくなった。

既に述べたようにチェコ文学では詩が最も上位のジャンルとされてきたし、実際19世紀を通して他のジャンルよりも多くの作品を生み出してきた。チェコ文学の翻訳も詩に重点が置かれてきたのだが、しかし19世紀の半ば以降のドイツ語圏で多くの読者を得ていたのは、ロシアの長編小説やスカンジナビア諸国の戯曲の受容が示しているように、詩ではなくて散文作品であった。Reclam 文庫に入ったチェコの文学作品が主に物語集や長編小説であったのも、こうしたジャンルの持つ社会的な効果の高さによるだろうし、また同じ理由から Sacher-Masoch も Čech に対して次のような依頼文を書いている。

「私たちはあらゆる文学を活性化しなければならないし、それ故にしょっちゅう同じ短編を持ち出すこともできないので、いかにもチェコらしい民衆生活を描いた本当に素晴らしい短編によって、チェコの文学を代表させてみたいと思っています。私たちの雑誌が、あなたの民族をそうした物語によって表現するとすれば、あなたを描いてふさわしい方はいないと思います。」⁽¹⁷⁾

Sacher-Masoch の眼中にあるのが、チェコ人の間で人気の高かった詩人 Čech ではなく、Reclam 文庫に入っている散文の名手 Čech であることは言うまでもない。

ジャンルだけではなく文学様式に関しても、受け手と送り手の間で認識のずれることが多い。翻訳者個人の文学的感性が作品選択の基準になった場合、選ばれた作品の様式が受け手ないし時代の感性に合わないという事例は、翻訳者がチェコ人であるとドイツ人であることを問わず、幾らも挙げることができる。例えば Reclam 文庫に入った2冊の Čech の散文作品のうち、Bauer 訳で1882年に出版された物語は、「現実離れをし熱情に満たされた」⁽¹⁸⁾ロマン派風の作品だったらしく、リアリズム様式が評価されている文化圏内での反響を期待することはできなかった。Vrchlický の数多くの翻訳も同じ結果に終わっている。1895年の Adler による詩選集が、チェコ・モデルネ宣言を経た後のチェコ側で暖かい取り扱いを受けなかったことは既に述べた。その後約10年間の Vrchlický の翻訳作品群は、ジャンルを問わず、どちらの文化圏においても、時代遅れであるとか、翻訳者の「自己満足」⁽¹⁹⁾の産物であると見

なされ、文化交流の活性化に繋がらなかった。ウイーンに住む Machar には、作品のテーマや文体の果たす役割の大きさがよくわかっていて、それで彼は1890年代の半ば頃、社会的不正や倫理の問題がその頃最も関心を引き易いテーマであったので、売春婦を扱った韻文作品『マグダレーナ』を翻訳してほしいと願っていた。しかし Machar に『マグダレーナ』の翻訳者が現われたのは10年後の1905年のことであり、Fux-Jelenský による訳自体は高い評価を得たのだが、翻訳のアクチュアリティは失われていた。

逆に翻訳された作品の様式が時代の嗜好に合えば、ある程度の反響が期待できた。『マグダレーナ』が出版された頃、Machar の関心は「人間を奴隷にする」教権主義とその対極にある古代というテーマに移っていて、1907年に『ローマ』という作品を著わした。この作品に対してはすぐに翻訳者が現われ、1908年には Saudek 訳による『ローマ』が店頭に並んでいた。原本が出版された翌年にドイツ語訳が出たというのは、それまでのチェコ文学の翻訳に比べて異例の早さである。しかしこの早さのおかげで、『ローマ』の翻訳は成功した。Saudek は同年に Březina の詩集『手』も出版しているが、Březina の「象徴的で、人類の未来に注意を向けている預言者風の詩」⁽²⁰⁾も、ドイツで表現主義が力を得てきたこの時期になって初めて反響を呼んだ。

ジャンルや様式がチェコ文学の受容過程で果たす役割の大きさは明白であるとして、翻訳の質の持つ意味ははっきりしない。粗悪なものに比べて優れたドイツ語訳の方が、必ずしも受け入れられる可能性が高いわけではなかった。それは、Vrchlický の翻訳者 Adler が次のように嘆いているのを見ればわかる。

「これまでの翻訳が全て、ひどいものであったのだが、並外れた感謝をされて受け取られていたのに、他方で今までチェコ文学から提供された本当に最上の翻訳としては初めてのものが(略)こんなにも投げ捨てにされた扱いを受けるとは、私には奇妙なことだ。」⁽²¹⁾

Adler はおそらく、かなりの反響を得た Grün による Vrchlický 訳などを念頭に置いているのだろうが、繰り返し述べれば、チェコ・モデルネ宣言後の時代にあつては、翻訳の良さも様式のずれを克服できなかったと言うことであろう。

二つの文化間で文化の交流が不均衡になるのは、今も見られる現象である。しかし、二つの文化の関係は高低差という比喩で捉えられるべきではないと思う。チェコ文学の受容過程が示しているように、文化間の「落差」や文化の「後進性」とは、経済的な格差や政治力の違いなど文化面以外の条件によって生み出された他民族および自民族に対する幻影であろう。今の日本とアジア諸国の関係を顧る時、ドイツとチェコの交流史から学ぶべきことは多いのではないか。

注

- (1) Rilke が Vrchlický に捧げた献呈詩。Jähnichen, S. 127 に拠る。
- (2) Morgenblatt für gebildete Leser, Jg. 57, 1863. Jähnichen, S. 22 に拠る。
- (3) Ebd.
- (4) Die Gegenwart, 1885. Jähnichen, S. 76 に拠る。
- (5) Ostdeutsche Rundschau, Jg. 3, 1893. Jähnichen, S. 405 に拠る。
- (6) Čechische Revue, Jg. 1, 1907. Jähnichen, S. 472 に拠る。
- (7) Vgl. Dietzel, Thomas und Hans-Otto Hügel: Deutsche Literarische Zeitschriften 1880-1945.

Bd 1, München, 1988, S. 242.

- (8) Čechische Revue, Jg. 5, 1912. Jähnichen, S. 410-411に拠る.
- (9) Jakubec, Jan: Geschichte der tschechischen Litteratur. Leipzig, 1907.
- (10) Vgl. Jakubec, S. 146-151.
- (11) 1885年のF. Jodlの書簡. Jähnichen, S. 71に拠る.
- (12) Pick, Otto: Neue tschechische Literatur. In: Herder-Blätter, Jg. 1, H. 4/5, Prag, 1912, S. 47.
- (13) 注11に同じ.
- (14) 1895年のAdlerのVrchlický宛書簡. Jähnichen, S. 152に拠る.
- (15) Vgl. Měšťan, Antonín: Das deutsche Interesse für die tschechische Literatur des 19. und 20. Jahrhunderts. In: Kaiser, Friedhelm Berthold und Bernhard Stasiewski (Hg.): Wechselbeziehungen zwischen deutscher und slawischer Literatur. Köln, 1978, S. 103.
- (16) Litterarisches Echo, Jg. 9, 1907. Jähnichen, S. 213-214に拠る.
- (17) 1882年のSacher-MasochのČech宛書簡. Jähnichen, S. 171に拠る.
- (18) Jähnichen, S. 173.
- (19) Jähnichen, S. 162.
- (20) Jähnichen, S. 294.
- (21) 注14に同じ.

Zur Rezeption der tschechischen Literatur im deutschsprachigen Gebiet

Tomoko OKOCHI

Seit längerer Zeit hat das tschechische und das deutsche Sprachgebiet in einem engen literarischen Verkehr gestanden, der nicht selten in einer einzigen Richtung befahren wurde. Während auf die tschechische Literatur die deutsche öfters einen starken Einfluß genommen hat, haben die meisten Deutschen wenig Neigung gezeigt, sich mit der tschechischen Literatur vertraut zu machen. In der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts war das Verhältnis nicht andersartig. Die Vermittlungstätigkeit, meistens von Prager Tschechen ausgeübt, wurde zwar seit den 80er Jahren strebsam entfaltet, doch war das Echo des deutschsprachigen Gebietes in der Regel schwach. Ein Grund, daß die tschechische Literatur nicht anerkannt wurde, liegt in dem politisch-sozialen Umstand der damaligen österreichischen Monarchie und in einem darauf eng bezogenen, schon eingewurzelten Tschechenbild. Der deutsche Nationalismus hat nämlich mit Erfolg propagiert, in Deutschen einen Kulturträger und in Tschechen einen Kulturempfänger zu sehen, was natürlich zur Schwierigkeit geführt hat, für die tschechische Literatur einen deutschen Übersetzer und einen deutschen Herausgeber nicht nur innerhalb, sondern auch außerhalb Österreichs zu finden. Dazu kommt ein anderer Grund, der in der unterschiedlichen literarischen Anschauung zu suchen ist. Die vermittelten tschechischen Werke haben zum größten Teil im Genre oder im Stil mit der zeitgemäßen literarischen Strömung im deutschsprachigen Gebiet nicht übereingestimmt und waren dort von weniger Aktualität.